

## 伝承と説話

### 1 大物主命とは何者

出雲の大国主命が国作りに悩んだ際、海の彼方から神が現れ、「私をきちんと祭るなら、私はお前と共にこの国を作っていこう。もしそうしなかったら、国作りは難しいだろう」「大和の国を青垣のように取り巻いている山々の、東の山の上に祀りなさい」と

崇神天皇(ミマキイリヒコイニエノミコト)期。疫病が蔓延し国中に死者が溢れる。天皇は嘆き悲しみ、夢の中に大物主命が現れ、「意富多多泥古」(オホタタネコ)※ 記「大田田根子」※ 紀 によって我を祀らせたならば疫病は収まり、国も穏やかになるであろう」と。

天皇は喜び、オホタタネコを河内の国に探し出し、神主として御諸山(三輪山)に大物主を祀る。宇陀の墨坂神を始め、近在に社を定め、祭器を作り供物を供え、疫病が鎮まったと言う。

大物主命の妻は活玉依毘売(イクタマヨリヒメ)※ 記 倭迹迹日百襲姫命(ヤマトトトヒモソヒメ)※ 紀 と言う。

ヨリヒメは容姿端麗の美人。ある夜彼女のもとに、例を見ない立派な美男が現れ二人は忽ち恋に落ちる。ほどなく姫は身ごもり、それを不思議に思った両親は「お前は夫もいないのにどうして身ごもったのか」と尋ねる。

姫は「お名前は存じ上げませんが、素敵な男の方が夜ごと通って来られ一緒に過ごすうち、自然とこのようになりました」と。

男の素性が気になる両親は、床の前に赤土を撒き麻糸の先に針をつけて男の袖に刺す。翌朝不思議な事に、麻糸は戸の鉤穴中を通り外へ出て美和に至り社でぶっつり途絶える。この男が神であった事を知る。三巻残った麻糸に因み、この地を「三輪」と呼ぶ。

日本書紀では、夫の正体が蛇と知り驚いて尻餅をつき、箆で陰部(ホト)を突き刺して死去したと言う。(箆墓伝説)

我々日本人が自然と共存した時代の営みが見え隠れする。また説話の主人公が卑弥呼であると言う説を唱える学者もいる。

大物主命は大国主命の和魂(ニギタマ・神霊のこと)であり、私は神の中の神ではなかったかと。また三輪王権の確立には伝承・説話の中に、出雲の神々の影響が色濃く語られており、ロマンの行く手には、今なほ謎解きが求められる。

文責 川井

## 2 哀しき勇者 倭 建命 (ヤマトタケルノミコト)

やまとは 国のまほろば たたなずく 青垣 山ごもれる やまとし うるはし  
(鈴鹿の能煩野(ノボノ)で亡くなる国偲びの歌)

第12代 景行天皇の御子。小碓命(チウスノミコト)。長じて倭 建命、紀では日本武尊と称す。気性荒々しく兄の大碓命(オホウスノミコト)を誅殺する。天皇はヤマト王権の倭国平定(三道將軍派遣 記)の故事を継承し、タケルを西国討伐に向かわせる。タケルは叔母の倭 比売命(伊勢神宮の斎宮)から衣と剣をもらい出発する。

九州では熊曾建兄弟に対し、髪を垂らして少女に扮し、祝宴に潜り懐の剣で刺し殺す。熊曾は倭の国に吾より建く強き人あり。吾御名を獻ずる、今より倭 建 御子と称うべし。

更に出雲国に赴き、出雲 建を討つ。友人となった相手に今度はイチイの木刀を作り川で水浴びをした際、「刀を取り替え様」と持ちかけ、太刀合わせを挑み、偽の刀を渡し、打ち殺す。

西国討伐から戻ったタケルは東の12ヶ国を服従させよと天皇の命を受ける。

タケルは途上、伊勢の叔母に会い、「天皇は私に死ねと思われている。」と告げ泣き叫ぶ。叔母は草薙剣と御囊を与え、危急の事あらば囊を開けなさい」と。

尾張国では、国造の祖である美夜受比売(ミヤズヒメ)と結婚。進んで東国を平定するが、相武国(相模国)で国造がタケルを野原におびき出し、火を放つ。

今こそ囊を開けると火打ち石があり、向かい火をつけて迫る火の手を退ける。タケルは村に戻ると国造を斬殺、村を焼く。現在この町を焼遣(焼津)と呼ぶ。

その後、更に試練は続くのだが、尾張に帰りミヤズヒメと結婚。伊服岐(伊吹山)の神を征伐に赴く。この時何故か草薙剣を持たず素手で立ち向かうが、牛ほどの猪(神の化身ではなく神自身であった)は雹を降らせ打ち惑わす。一命は取り留めたものの、体調は悪くなるばかり、能煩野で冒頭の望郷の歌を残し、没す。

英雄の悲しみの言葉がある。「私の心はいつも大空を飛びまわっていたのに、今は歩くことも難しくなってしまった」。後は能煩野に御陵を造るが弔いの歌と共にタケルの魂は白鳥となって飛び立ち、河内国 志磯(今の志貴か)に留まり御陵を造り「白鳥陵」と名付ける。しかし白鳥はさらに高く、天に向かって飛翔したと言う。

古事記の景行天皇の条は 倭 建命の武勇と悲哀に満ちた伝承に尽きる。

文責 川井

## 神話の故郷 山辺の道を歩く

この資料は、水本洋氏（シニア  
自然大学校9期）のご提供による  
ものを主体に、一部追加して  
作成しました。 古川

### 『山の辺の道』

千数百年の昔、三輪山の南麓から、巻向山、竜王山、高峯山、城山、高円山の山裾をめぐる北に向かう道があった。この道のほとりは日本の古代国家成立にかかわる重要な地である。三輪王朝とも呼ばれる日本最古の王朝を築いた大王達の墳墓が集中して点在している。伝説に彩られた「箸墓」や「崇神天皇陵」「景行天皇陵」などである。

最近の考古学の成果で古墳発生期が従来より約50年早い3世紀前半ではないかと考えられるにいたった最古級の「勝山古墳」や「ホケの山古墳」などもある。日本で最も早く開けて多くの人口をかかえ、このあたりが最初の王権が成立した地と考えられている。したがってこの道は日本最古の道と考えてもよい。今は田園にかえってしまったが、四季折々に花が咲き、いつ訪れても楽しい道である。

### 『大神(おおみわ)神社』

三輪山西麓に鎮座。祭神は大物主神、大己貴神、少彦名神の神とするが記紀によればもとは大物主神一座であり、この大物主とは三輪山そのものである。従って、この神社は本殿を持たず、ご神体は三輪山そのものである。更に記紀によれば崇神天皇の時代、大物主神の崇りを鎮めるため祭祀を行ったのがはじまりである。この時酒掌をおいて祀ったので、三輪は酒の神ともなった。三輪の枕詞を「味酒」というのもそのためである。また、三輪の杉は神木であり、この杉の葉でつくった「杉玉」が拝殿正面に吊されている。全国の造り酒屋に新酒のできたことをしるす杉玉はここからでたものである。

味酒を 三輪の祝が いわふ杉 手触れし罪か 君に逢いがたき

卷四一七一

二

### 『三輪山』

山辺の道の南、泊瀬の谷の入り口に位置する円錐形のきれいな山。標高四六七メートル。松、杉、檜などの常緑樹におおわれ、古来、神の山として崇められ「三諸」と呼ばれた。「三諸」とは天上から神の降臨する地の意味で各地にあるが、その中心をなすのが三輪山である。山中には磐座、磐境と呼ばれる古代の祭祀遺跡があり、山麓各地から弥生時代の遺跡が発掘されている。早くから大和朝廷の守護神として畏敬された。古代、歴代の都が山辺や磐余、飛鳥に築かれたのも、この山に関係があると思われる。但し、三輪の神が朝廷に対しては崇りの神としてあらはれるところに、この山の特異性があり、王権の交替があったことを示唆するとも考えられる。今も大神神社の神体をなす山である。

額田王の近江の国に下りし時(667年)に作れる歌

味酒 三輪の山 あをによし 奈良の山の 山の際に い隠るまで 道の隈 い積もるまでに  
つばらにも 見つつ行かむを しばしばも 見放けむ山を 情なく 雲の 隠さふべしや

卷一一一七

三輪山を しかも隠すか 雲だにも 情あらなも 隠そうべしや  
巻一一十八

### 『狭井神社』

大神神社の摂社。祭神は大物主神・五十鈴媛(神武天皇皇后)など、創祀は垂仁朝という。この社の「鎮花祭」は大宝のころからの国家的大祭であった。今は四月十八日に行われる。一名「葉まつり」というのは葉草を供えて祈願するからである。拝殿裏には葉井がある。

山振の 立ち儀ひたる 山清水 酌みに行かめど 道の知らなく 高市皇子  
巻二一一五八

### 『檜原神社』

大神神社の摂社。祭神は天照若御魂神、創祀は不明。古図を見れば、大神神社と同じく本殿をもたず、三輪山をご神体としたものである。皇祖神と三輪の大物主神を合体させた特異な形のものである。「日本書紀」崇神六年の条に、それまで宮中に奉祀していた天照大神を笠縫邑に遷すとあるがその「笠縫邑」の最も有力な伝承地である。

いにしえに ありけむひとも わが如か 三輪の検原に 挿頭折りけむ 七一一一八

### 『井寺池』

この池畔に川端康成の書になる日本武尊の有名な望郷の歌碑がある。

やまとはくにのまほろば たたなづくあおがきやまごもれる やまとしうるわし 古事記

### 『巻向川・弓月が嶽』

巻向川は巻向山に発し、三輪山の北麓を西に流れる川、南麓を流れる三輪川と共に聖なる川であった。弓月が嶽は、今の巻向山を指すものと思われる。ユツキとは斎槻(神聖なる槻の木)あろう。

あしひきの 山川の瀬の 響るなへに 弓月が嶽に 雲立ち渡る  
柿本人麻呂歌集 巻七一一〇八八

巻向の 山邊とよみて 行く水の 水沫のごとし 世の人われは 同 巻七一一二六九

### 『ホケの山古墳』

箸墓のすぐ東に位置する全長八〇メートルの前方後円墳。周囲には周濠を巡らしている。後円部中央には我が国最初の「石囲い木槨」が認められる。その内部には、コウヤマキ製の長大な削り抜き式木棺が収められており、古墳の被葬者は、木の棺、木の部屋、石の部屋というように三重に包まれていた。このような古墳は今まで例をみない形式で、木棺の底にひかれたと思われる水銀朱が今なおはっきりと認められた。また、後漢の作とみられる画文帯神獸鏡が副葬されていた。古墳の築造年代は箸墓古墳より古く、三世紀中頃とされるが、木棺片の放射性炭素の年代測定では、三世紀前半に遡る数値が示されており、それはまさに卑弥呼生存の時代である。この付近一帯、古墳時代の

大規模な「<sup>まきむく</sup>纏向遺跡」がひろがっており、「邪馬台国大和説」を裏付けるものという学者もいる。

## 『箸墓』

<sup>やまとととひももそひめのみこと</sup>倭迹迹日百襲姫大市墓、通称箸墓。三輪山西麓にある古墳時代前期の最大級の前方後円墳。3世紀後半の築造と考えられる。全長272メートル、周濠の一部が北側に池として残っている。倭迹迹日百襲姫は日本書紀によれば孝霊天皇の皇女(古事記では孝元天皇皇女)で三輪の大物主神との神婚説話を残すが、一方、『魏志倭人伝』にいう邪馬台国の卑弥呼をこの姫に比定する説があって、そこからこれを卑弥呼の墓とする見方もある。

(最近の前方部の発掘の結果、幅60～70メートルの大規模な馬蹄形の周濠が古墳全体を囲んでいた可能性があり、被葬者の強大な権力が伺われる。また、出土土器の放射性炭素年代測定法による築造年代を西暦240～260年とする説もある。卑弥呼の後継者壺与とみる説もある)

日本書紀の崇神天皇記に

「倭迹迹日百襲姫命、大物主神の妻となる。然れども其の神、常に昼は見えずして、夜のみ来す。姫命、夫に語りて曰く『君常に昼は見えたまわねば、<sup>あきらか</sup>分明に其の尊顔を視ることを得ず。願わくば<sup>しばし</sup>暫留りたまへ。明旦に、仰ぎて<sup>みすがた</sup>美麗しき威儀を觀たてまつらむと欲す』といふ。大神對へて曰く『<sup>ことわり</sup>言理灼然なり。吾<sup>くるつあした</sup>明旦に汝が<sup>くしげ</sup>櫛笥に入りて居らむ。願わくは吾が形にな驚きましそ』とのたまふ。ここに姫命、心の裏に<sup>ひそか</sup>密に異ぶ。明くるをまちて<sup>あやし</sup>櫛笥を視れば、遂に<sup>まこと</sup>美麗しき小蛇あり、其の<sup>ながさふとさしたひも</sup>長大衣紐の如し。即ち驚きて<sup>さけぶ</sup>叫啼ぶ。時に大神恥じて、忽ちに人の形と化りたまふ。其の妻にかたりて日ほく、『汝、忍びずして吾に<sup>はじか</sup>羞せつ。吾還りて汝に<sup>はじみ</sup>羞せむ』とのたまふ。よりて<sup>おおぞら</sup>大虚を<sup>ほ</sup>踐みて、<sup>みもろやま</sup>御諸山に登ります。ここに姫命仰ぎ見て、悔いて、則ち<sup>ほと</sup>箸に<sup>おおみたから</sup>陰を<sup>たごし</sup>撞きてかむさりましぬ。乃ち大市に<sup>うたよみ</sup>葬りまつる。故、時人、その墓を<sup>うたよみ</sup>号けて、箸墓という。是の墓は、<sup>ひる</sup>日は人作り、夜は神作る。故、大坂山(二上山)の石を運びて造る。則ち山より墓に至るまで<sup>おおみたから</sup>人民あいつぎて、<sup>たごし</sup>手通傳にして運ぶ。時人、<sup>うたよみ</sup>歌しては曰く

大坂に 継ぎ登れる 石群を 手通傳に越さば 越しかてむかも

## 『<sup>まきむく</sup>纏向遺跡と纏向古墳群』

<sup>まきむく</sup>纏向遺跡は三輪山のすそ野に、東西南北約二キロの広大な面積に、幅5メートル、長さ推定2600メートルにも及ぶ巨大運河や倉庫群と思われる建物などを備え、南関東、東海、北陸、山陰、瀬戸内、九州からも人が集ったことを示す土器が多数出土(外来形の土器が全土器量の15～30%を占める。通常、他の弥生遺跡は3～5%)、この地が日本最古の「都市」の様相を呈する三世紀の遺跡である。最盛期の人口は一万人を優に越えたのではないかと思われる。

<sup>まきむく</sup>纏向古墳群(箸墓、勝山古墳、石塚古墳、矢塚古墳、ホケの山古墳、<sup>ひがいだ</sup>東田大塚古墳、南飛塚古墳)は我が国最古の古墳群で、従来三世紀後半頃の築造と考えられていたが、平成13年1月の勝山古墳の調査で、周濠から多数出土した木材を、奈良文化財研究所の<sup>ひがいだ</sup>光谷氏が「<sup>ひがいだ</sup>年輪年代測定法」による年代測定をおこない、その結果この木材の伐採年代は西暦203～211年であることが判明した。これは実に驚くべきことで、弥生時代と考えられていた邪馬台国の時代(2世紀末～3世紀後

半)がすでに古墳時代であつたということを示している。古代の年代観を変える画期的な成果であつた。

ホケの山古墳と勝山古墳の調査結果により「邪馬台国は古墳時代」であることがはっきりとし、3世紀初めには強大な勢力が大和にあつたことがわかつた。考古学者河上邦彦氏は「古墳時代はずではじまっております、初期大和政権は生まれてきた可能性は強い」としている。また、平成21年の秋、この遺跡の中核部と思われる場所から、3世紀代では最大の建物の遺構が発掘された。この遺構は四棟の建物が東西に一直線に計画的に配置され、他の同時代の遺構に類例を見ないもので、耶馬台国の卑弥呼の宮殿ではないかと多くの人々の関心を呼んだ。次いで平成22年この遺構に隣接する南側の土壌から日本各地の土器、12種の動物と魚の骨など50点の遺物、さらに中国で尊ばれた桃の種2675ヶ、祭祀道具と供え物一式が出土した。

### 『柳本古墳群』

纏向古墳群、大和古墳群に次いで古いとされる。主なものに、行燈山古墳、渋谷向山古墳、櫛山古墳(双方中円墳)、黒塚古墳などがあり、3世紀後半～4世紀の築造とされる。いずれも三輪王朝の大王クラスのものとして位置付けられている。

### 『黒塚古墳』

1997年に発掘された3世紀後半築造と考えられる全長130メートルの前方後円墳。竪穴式石室の中に消失しているが割竹式木棺があつたものと思われる。遺物としては画文帯神獸鏡一面の他に32面もの三角縁神獸鏡が副葬されていた。被葬者は三輪王朝の有力メンバーであつたと思われる。

### 『景行天皇山辺道上陵』 — 渋谷向山古墳

全長300メートルの前方後円墳。日本で七番目の大古墳。傾斜地で周濠をきざんで水をたたえている。周りに二、三の培塚をもつ。4世紀に築造されたもの推定される。

### 『崇神天皇山辺道<sup>まがり</sup>岡上陵』 — 行燈山古墳

全長242メートルの日本で15番目の前方後円墳。壮大な周濠をめぐらせているが、景行陵と同じく傾斜地なので北側3段、南側2段にくぎっている。周濠は幕末、文久年間に灌漑用水池として拡大された。文久の修陵の一つである。周辺に四つの培塚をもつが、そのうちに多数の鏡の出土で有名な天神山古墳がある。4世紀の築造と思われる。

### 『櫛山古墳』

全長160mの大型古墳で、三角縁神獸鏡を多数出土した黒塚古墳とともに柳本古墳群を代表する古墳の一つに数えられている。古墳が築かれた年代は、4世紀後半、すなわち古墳時代前期と推測されている。古墳の形は、埋葬設備を構築した中円部の西側に前方部、東側にも短く突出する後方部を築いた珍しい墳形で、考古学では双方中円形の古墳という。

### 『長岳寺』

天長元年(824年)、淳和天皇勅願により空海が創建。盛時40余の堂宇があつたが、室町末、松永久秀の十市城攻めで焼亡、衰微した。現在真言宗。庫裡で頂く「三輪そうめん」がおいしい。

## 『大和古墳群』

古墳群には、前方後円墳 12 基、前方後方墳 5 基、円墳 7 基の存在が知られている。これらの古墳は、丘陵上の一群を中山支群、扇状地上の一群を萱生（かよう）支群に分かれ、「中山古墳群」「萱生古墳群」の呼称もしばしば用いられる。

主なものに、大和古墳群中最大の前方後円墳である西殿塚古墳（墳丘長 234 メートル）、これに次ぐ全長 175 メートルの東殿塚古墳、古墳発生期までさかのぼる可能性の指摘された中山大塚古墳（120 メートル、県史跡）、下池山古墳などがあり、これらは柳本古墳群に先行して築造された古墳時代前期の属するものが多い。このなかで、西山塚古墳のみが 6 世紀前半ころの造営によるものである

### 『<sup>たしらかのひめみこふすまだのみさぎ</sup>手白香皇女衾田陵』 — 西殿塚古墳

大和古墳群の最大の古墳で、全長 234 メートルの前方後円墳。箸墓古墳に次いで古く 3 世紀後半～4 世紀前半の築造と推定される。宮内庁は手白香皇女陵（継体天皇皇后）に治定するが、6 世紀の継体朝と時代が合わず、時代的にみて卑弥呼の次の女王「台与」の墓とする意見がある。隣の東殿塚古墳もほぼ同時代とされている。

（注）本古墳群に属する西山塚古墳が、埴輪が継体天皇の真陵と言われる今城塚古墳と同じ高槻市の新池遺跡で焼かれていることから、手白香皇女の衾田墓はこの古墳だという説がある。

なお「衾田陵」の名称から付近「衾」の地名があったことを想定し、「(衾路を)引手の山(竜王山か)」をこのあたりに求める説が強い。

柿本朝臣人麻呂、妻<sup>みまか</sup>死<sup>し</sup>りし後、泣<sup>きゅう</sup>血<sup>けつ</sup>哀<sup>あい</sup>慟<sup>どう</sup>して作る歌

去年<sup>こぞ</sup> 見てし 秋の月夜は 照らせれど あひ見し妹は いや年さかる 卷二—二—

<sup>かすまは</sup>衾道を 引手の山に 妹を置きて 山路を行けば 生けりともなし 卷二—  
二—

## 『<sup>おおやまと</sup>大和神社』

祭神は倭<sup>やまと</sup>大国魂神・八千矛神（大国主神）・御年神。倭大国魂神は、国土の経営神であり、大和の地主神である。創建は崇神・垂仁朝にさかのぼる。大神神社、石上神社と並ぶ日本最古の国家的な社である。現在の本殿は明治時代のもの。

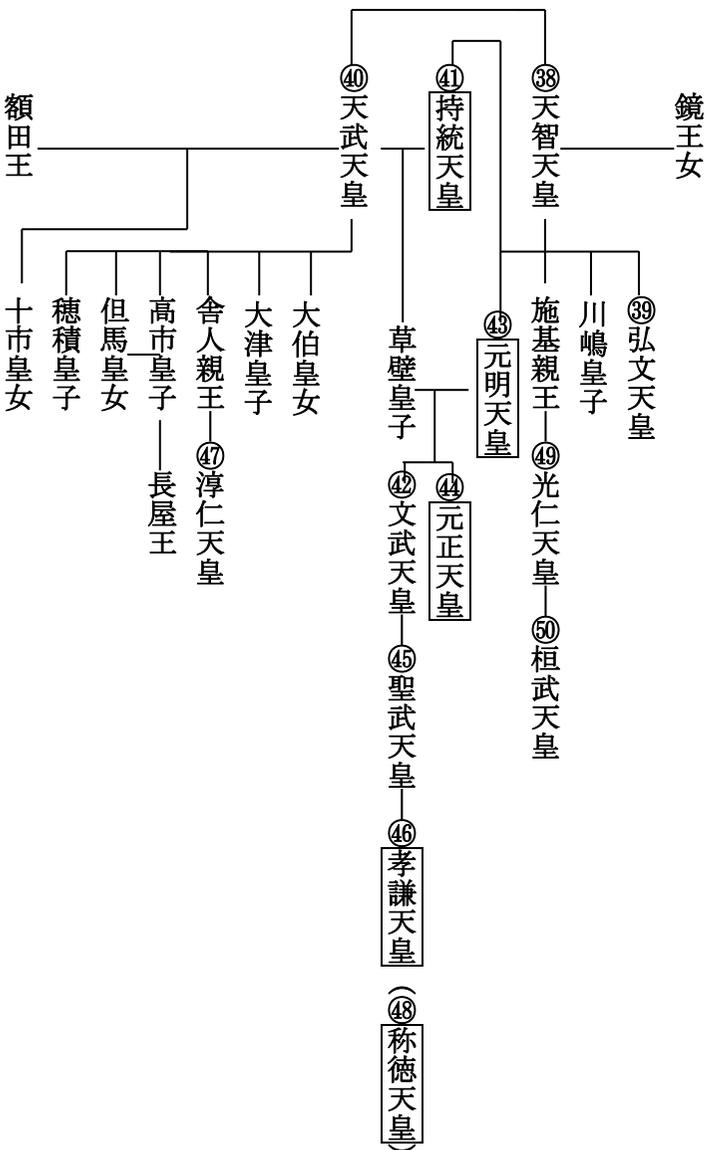
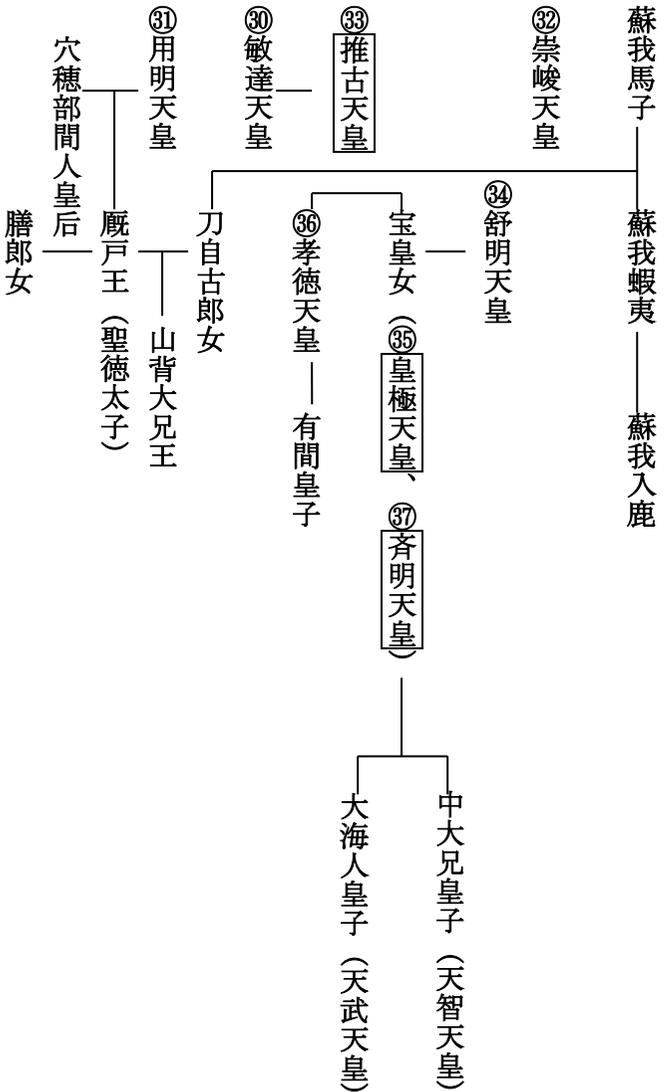
戦艦大和にはこの神社が祀られていた。因みに、戦艦大和の大きさは長さ約 250 m、幅約 40 m で、大和神社の参道（一の鳥居から二の鳥居まで約 250 m）とほぼ同じ長さでといわれている。

『日本書紀』によれば、倭大国魂神は天照大神とともに大殿に祀られていたが、世の中が乱れ謀反を起こすなどするのは、両神の勢いだと畏れられた。そのため崇神天皇 6 年、倭大国魂神を皇女淳名城入姫を斎主として祀らせたが、淳名城入姫は髪が落ち体は痩せて祭祀を続けることができなくなった。崇神天皇 7 年倭迹迹日百襲媛命が夢で「大倭直の祖・市磯長尾市（いちしのながおち）をもって、倭大国魂神を祭る主とせば、必ず天下太平ぎなむ」との神託を受け、神地が定められ鎮座・創建された。

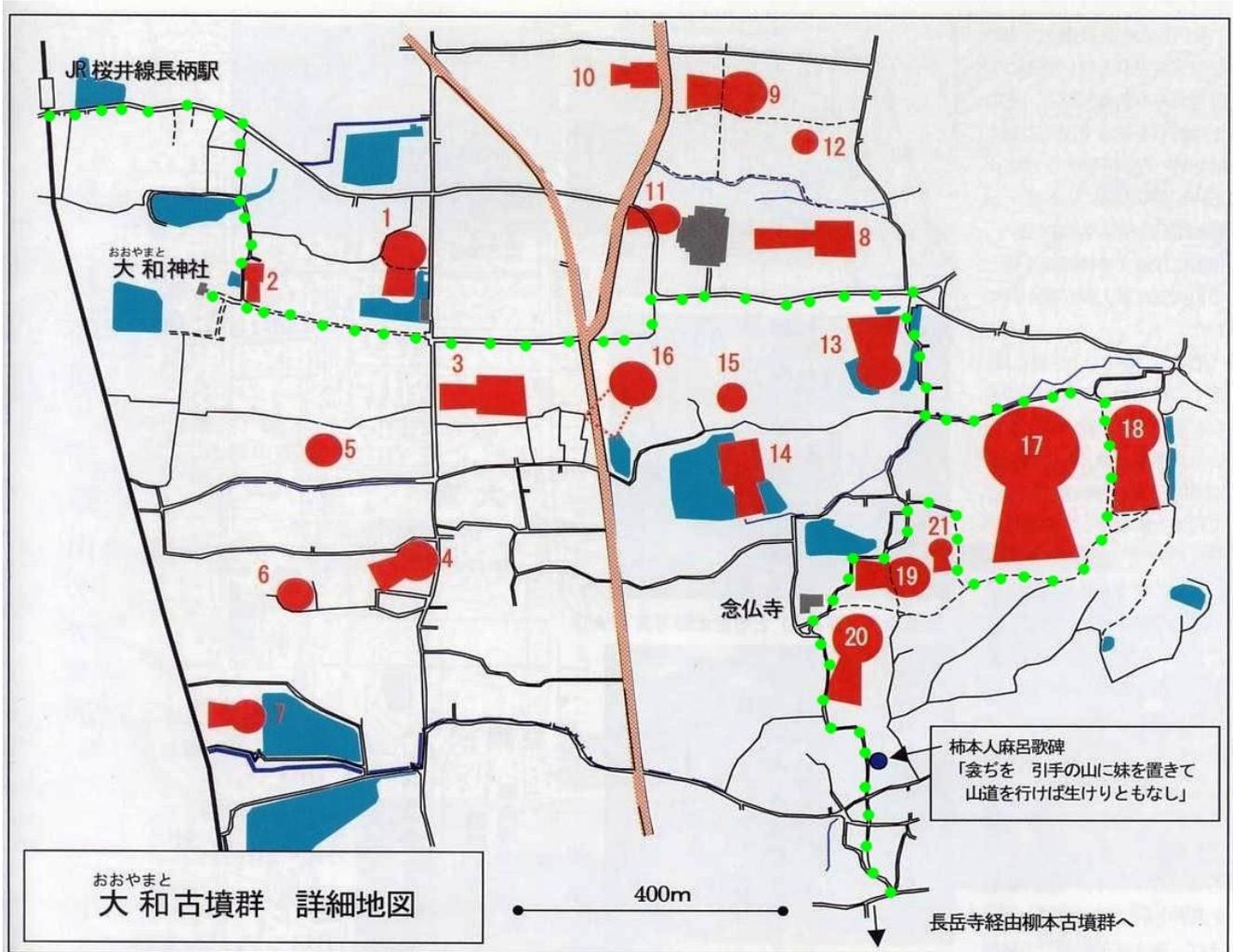
当初の鎮座地は、現在の桜井市穴師および箸中の付近であるとみられ、後に現在地に遷座したとされる。一説には現在の長岳寺の位置であるという。

# 皇統譜

538年 ⑳欽明天皇の時に百濟より仏教伝来する  
 645年 乙巳の変(大化改新)  
 658年 有間皇子藤白坂(海南市)で刑死す(十九才)  
 663年 白村江(はくすきのえ)の戦い  
 672年 壬申の乱  
 686年 天武天皇崩御、大津皇子死賜う(二四才)



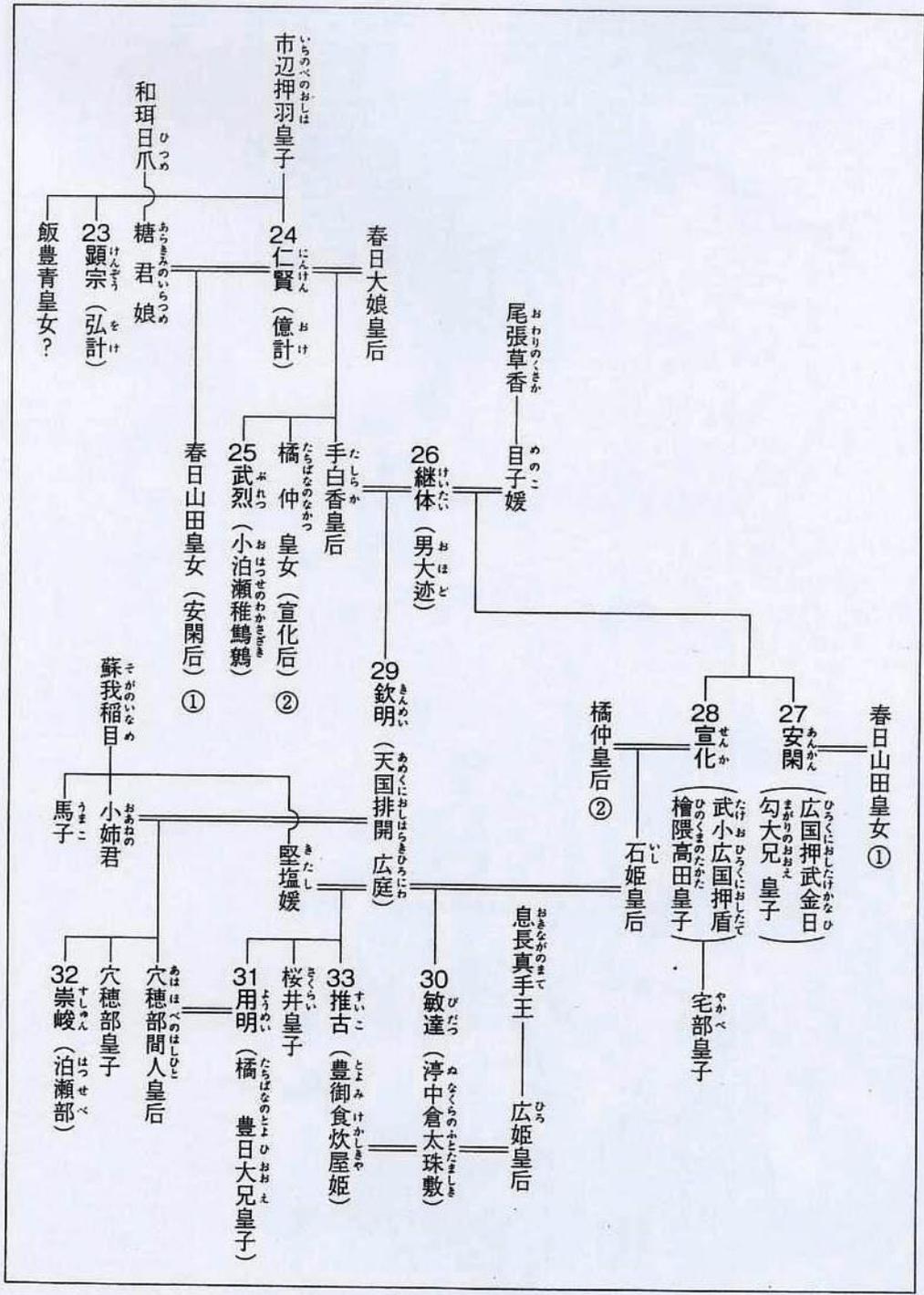
## 大和（おおやまと）古墳群分布図



歩行コース から見える古墳の特徴を下記に纏めました。

1. 馬口（ばくち）山古墳：墳丘長110mの前方後円墳
2. 星塚古墳：方形の連結した特異な形の前方後方墳（後方部は1辺60mの正方形）
3. フサギ塚古墳：前方後方墳、（後方部60m）
5. 平塚古墳：径約54mの円墳
8. 波多子塚古墳：墳丘長140mの前方後方墳（90mの前方部と45mの後方部）
11. マバカ古墳：墳丘長74mの前方後円墳
13. 西山塚古墳：墳丘長114mの前方後円墳、  
継体天皇の皇后である手白香皇女墓の可能性も指摘されている
14. 下池山古墳：墳丘長120mの前方後方墳、長さ6mほどのコウヤマキ木棺が出土
15. 西ノ塚古墳：径約35mの円墳
16. 栗塚古墳：墳丘長120mの前方後円墳
17. 西殿塚古墳：墳丘長234mの前方後円墳（衾田陵：手白香皇女墓に指定されているが、  
古墳からの出土品などから、初期の古墳であり年代が一致しない）
18. 東殿塚古墳：墳丘長140mの前方後円墳（前方部の長い形が特徴）
19. 燈籠山古墳：墳丘長110mの前方後円墳（前方部の長い形が特徴）
20. 中山大塚古墳：墳丘長120mの前方後円墳

以上



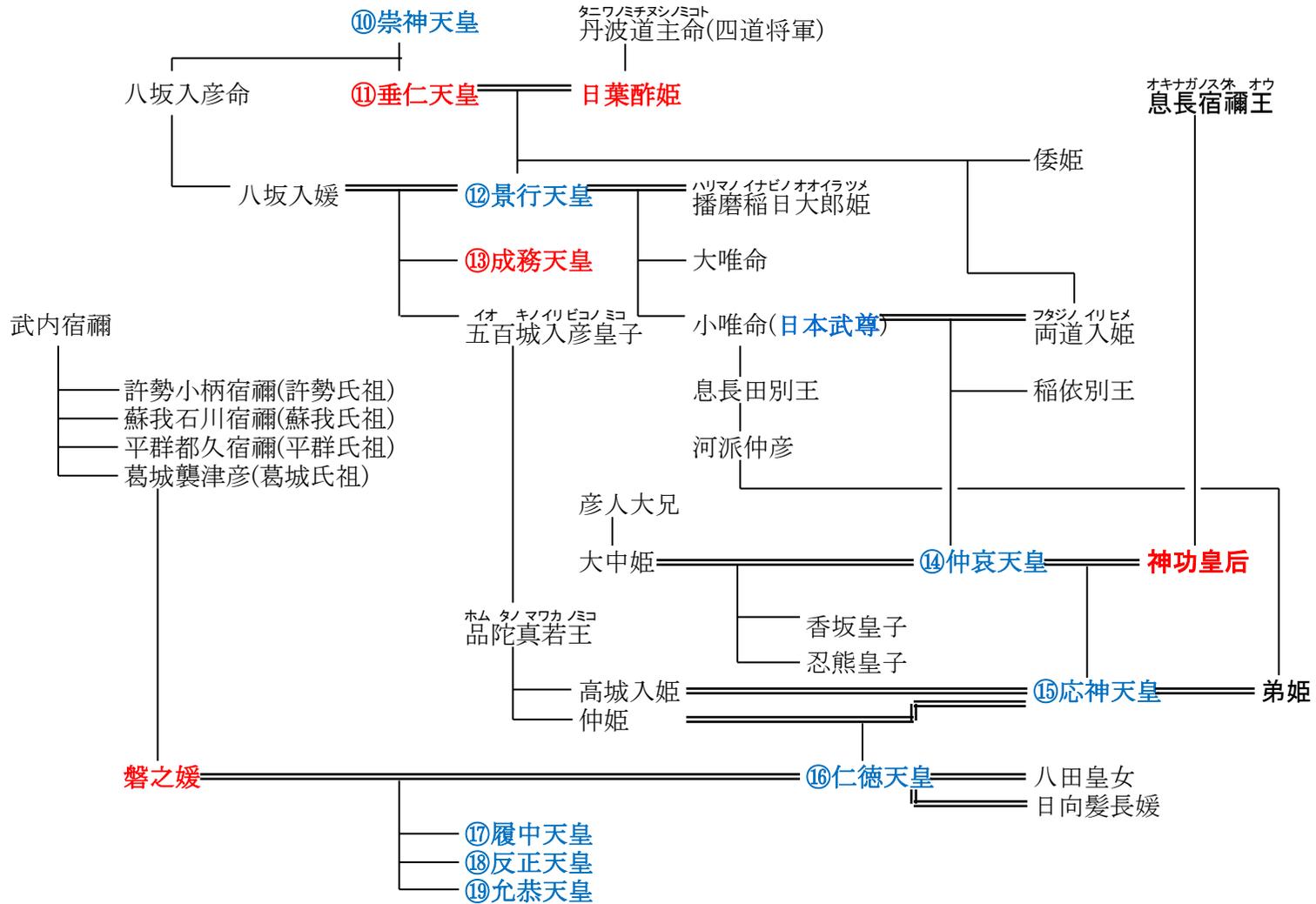
『延喜式』諸陵寮式

衾田墓 手白香皇女。在大和國山邊郡。兆城東西二町。南  
北二町。無守戸。令山邊道向岡上陵戶兼守。

日本書紀による大王の系譜 (○印の数字が同じものは同一人物)



# 古代天皇・豪族関係系図



赤字は佐紀に関係のある人物